

## 夫婦の情景

今日 あした

脱衣所から一步外に出ると木で出来た通路は凍っていた。藍は、タオルで前を覆い片手で手すりにつかまりながら滑らないように温泉に入っていた。湯は熱いのに通路はすぐ近くまで凍っている。気温が余程低いのだろう。ひざを折って肩まで湯に浸かってから周りを見廻した。何人かいるようだが湯気で頭部のシルエットしか見えない。女性の一団のようだ。夫の太が男子用の脱衣所からこの広い混浴の温泉に入った筈だ。

藍はいざりながら広々とした露天風呂の中央まで進んだ。湯気で霞んでいても夫はシルエットで判る。人工の築山を背に首まで湯に浸かっている。気の毒なほどひっそりとしている。

「太さん、女性群を恐れずにもっと真ん中に入れてほしいのに」

そう言うと、藍の冗談に切り返すこともしないで

「もういいよ、出る」。

太は立ち上がってそのまま脱衣所の方に歩き出した。

「今入ったばかりなのにな？：：：」

「仕方がないかー」 藍は思った。三月だというのに雪はまだ降っている。昼間はもつと酷ひどかった。

異常気象で、昨夜から天気が急変し、近年稀に見るほどの大雪になったのだ。

昨日は角館に泊まり、今朝早く宿を出た。藍も太も思いもよらぬ豪雪に浮かれた。

「スノータイヤだけで大丈夫かしら、チェーンも着ける？」

「大丈夫だろう、俺が運転するよ」

「駄目よ、私が：：：」

藍の運転で出発。除雪をしていない山道はタイヤが隠れるほど雪がある。

「ハンドル、取られないか？」

「スノータイヤは優秀よ！」

二人とも運転が好きなのだ。連休があると必ずと言って良いほどドライブに出かける。家に居たくないから：：：。

太は長男で、親と二世帯同居をしている。その敷地内に弟一家も家を建てて住み始めた。急に人間関係が複雑になって煩わしいし、めんどくさい。そこで、旅行会社に勤める太が、長い休みの度にせつせと旅行に連れ出してくれるようになった。

今回は、角館、乳頭温泉、そして十和田湖温泉と、三泊四日の予定で来てい

る。

田沢湖駅で昼食を済ませ、運転を交代した。山道に入って行く。車の轍はあるが、あまりのドカ雪に道がわからなくなってしまふのではないかと藍は不安になり、つい助手席から「大丈夫かしら」と口にする、

「ほら、竿の先に赤い印があるだろう、さすが雪国だね」。

太の明るい声が返って来た。本当に、道の両側には赤い道しるべがある。藍はホツとして背中をシートにあずけた。山道は曲がりくねっている。

あつ、ハンドルが取られている。蛇行したと思つた瞬間、ドンと何かにぶつかって止まった。周り一面、真っ白の雪の中を、二人同時に外に出て見ると、道はこれから橋を渡るところで、その欄干にぶつかって止まったのだ。

「川に落ちないで良かったね」藍は背筋がぞーっとした。

車の前はへこんでしまったが、エンジンには異常がなさそうだ。太はがっくりと肩を落としながらも、藍に交代することもなく、乳頭温泉迄自分で運転をしてきたのだった。

藍は、露天風呂から早々に戻って行く太を目で追いながら

―東北には一体何があるのだろうか― と思つた。

宿は乳頭温泉郷にある旅館で、前に来たことがあり、気に入って又来たのだつた。黒の板塀に続く門から中に入るとすぐに長屋があり、ずらりと並んだ部屋の一つづつに上がり框がついていて、そこに靴を脱いで部屋に入るようになっていゝ。囲炉裏の切つてある屋内は田舎風だが、トイレや風呂など最新式に快適に出来ている。

露天風呂から帰つて来ると、囲炉裏に座る太の前には日本酒が置かれていて、いなせな作務衣のお兄さんが、てきぱきと食事の準備をしていた。前に来た時もそうだったが、ここでは若い男性がきびきびと動いて客の世話を焼いてくれる。見ているだけで、何故か身の引き締まるような気分になれる、……のは藍だけのようだ。

料理がある程度並ぶと、太は

「後はやるからいいよ」と、お兄さんを下がらせた。

囲炉裏の自在鉤には、芋やキノコなどがたっぷり入った鍋が下がり、炭火の周りでは串に刺した岩魚を焙っている。

「ムードたっぷりね」

二人になると、藍がおどけて日本酒を手に取り、まあ一杯と酌をする。

「今回もやっぱり事故を起こしたね」

太は、猪口を少し持ち上げて乾杯でもするようにそう言った。

「そうね、でも、ここは秋田よ、福島じゃないのにね」

太は慎重な性格で運転は丁寧だ。車が好きで日本中ドライブ旅行をしているが事故など起こしたことがない。

東北以外では……。

その東北での事故。最初はまだ結婚前に、二人で遠出をしているの間にか福島まで来てしまった時のことだった。田舎道に迷い込み、対向車と接触して片側の車輪が田んぼに落ちてしまったのだ。太はそれまで車にかすり傷すらつけたことがないと自慢していたのに……。

二度目も福島だった。事故など起こりようもないほどの二車線のアスファルトの道路で、見通しも良かった。それなのに、あぜ道から対向車線に出てきた車が大幅に車線をオーバーしたのを避け切れず、事故になってしまった。

その時はもう結婚をしていて、東京で太の両親と、祖母の五人暮らしだった。孝行息子で心配など掛けたことのない太が二度も事故を起こしたので、家じゅうが大騒ぎになった。祖母は、若夫婦を前に、

「福島は、あなたたち夫婦によほど因縁があるのだろうから、近寄らないでくださいなさい」と真面目な顔で言っていた。

次は、その祖母も、とうに亡くなり、藍たち夫婦も子育ての忙しい時期が過ぎ、十年ぶりに二人で紅葉を観に五色沼までドライブ旅行をした時だった。

そこでまた太は事故を起こした。車と接触してもう少しで沼に落ちそうになったのだ。今度はこちらが悪かったようで、太はしきりに謝って保険会社と連絡を取り、

「すべてこちらで修理致します。その間、代わりの車を御用意させて頂きますので……」と、同じくらいの年配の相手に言っていた。

囲炉裏端で食事をしながら、そんな話をして、藍は

「あの時は本当に危なかったけど、太さんがあんまり社会人っぽくて笑っちゃった」

「もういいよ、その話は」

「でも、因縁って本当にあるのかしら」

「そんなの知らねえよ」

この話になると、太はとても不機嫌になる。

あの事故の後、五色沼で泊まった宿の女将さんが、可笑しかった。

「福島に來ると事故を起こすのですよ」、と言うと、

「あら、何か因縁があるのかも知れませぬわね。後で私が占って差し上げるわ」  
「え、それで因縁がわかるのですか」

「ご興味がありませんでしたら、温泉に浸かってからでも声を掛けて下さいな」

親切に言ってくれたのに、太は全く取り合わず、風呂を出ると、  
「俺はいいよ」とさっさと部屋に戻って行った。

帳場に声を掛けると、女将さんは湯上りにちよつと休んでいくような個室に藍を案内してくれて、一冊の本と円盤の形をしたホロスコープ（占星盤）なるものを持ってきてテーブルに置いた。

「これは、ホロスコープと言いましたね、古代インドで密教の秘術として生まれた宿曜占星術に使う占星板です。これで占うのですが、ただの占い、なんて思わないで下さいね。その後インドから中国に伝わった密教の「宿曜経」という經典になりました、日本には平安時代に弘法大師・空海によってもたらされたのですよ。

それまでは占いと言えば「陰陽道」のようなものばかりで、西洋流のホロスコープはなかったのですが、宿曜経の伝来で初めてホロスコープによる占星術が日本に伝わったのです。それこそ千年以上の歴史を持つ由緒正しい占星術なのです」

藍は、私にわかるのかしら、と思いつつながら講釈を聞いていた。

「それは、天体の動きと地上の人間の誕生の日が結び付いた、宿命の星というものが決つていまして、ホロスコープ（占星板）にしろされています。その一つ一つを宿と言ひ、二十七種類あるのです。生年月日と天体の動きによって決められた同じ宿の人は、太古から人間としての感覚とか、考え方が全く同じだったそうです」

「何だか難しそうですね、それは宗教ですか」藍は恐る恐る聞いてみた。

「難しい伝来や奥義はさておき、私が見るのは単なる占いです。

あなたとご主人の生年月日を教えて下さい。調べて差し上げます」

藍は、いまいち理解できなかつたけど、二人の生年月日を言った。

女将さんは、何やら紙に書きながら本を繰って「ああ、ご主人は「井宿」で貴女は「女宿」だわ、やっぱり」とつぶやいた。そして円盤を指し示して、

「ホロスコープ（占星盤）でみると、お二人は一番遠い距離にある星同士（安・懐）の関係です。これは破壊星と言って、お互いに強く惹かれ、結ばれるのですが、一方が他方を破壊してしまうのです。お客様の場合は、奥さまが旦那様を破壊してしまいます」

「ええっ、破壊ですか？　なんだかおどろおどろしくありません？

それと福島に來た時だけ事故が起きるのはホロスコープと関係があるのでしようか」

「それは……、輪廻転生、因果応報、何か因縁がおありになるのですよ、きつと」

「そんなあ……、女将さんにはわかるのですか」

「わかりません。でも、昔から有名な武將がこの占星術を使って戦いに勝ってきたのですよ。家康の孫の千姫は、秀頼と淀君、両方とも破壊する星だったのです。それを承知で家康は千姫を嫁にやっただけと言われていますよ。だから戦国武將たちは滅多なことでは自分の生年月日を明かさなかつたそうです。

二十七種類の宿っているのは、人間の宿命みたいなものです。そう、貴方がたご夫妻の、この〈安・懷〉の関係の夫婦は、五〇%の方が別れてしまうと言われています、死別とか、離婚とか……」

「あら嫌だ、そんなことを言われても困るわ」

「まずは敵を知る！ですわよ。いえ、敵と言ってもご主人のことではなくて占星術のことですよ。この宿曜占星術のお勉強をなさつて備えれば、憂いは遠のきますわよ。知ることは力です。よろしかったら、この本をロビーで販売していますので、お求めになつては如何ですか？」

女将さんの茶目つ氣たつぷりの売り込みに、藍はすっかり煙に巻かれて、何故福島に來ると事故に遭うのか、聞こうとしてここに来たことも忘れて！

「じゃあ、頂こうかしら」と一冊千八百円もする本を買つてしまった。

太に「高いなー、そんなの買わされちゃったの〜」と馬鹿にされたが……。

調べれば調べるほど面白い。宿の二十七種類の中には「井宿・女宿」の外に「危宿」「鬼宿」「星宿」というのもあつた。

調べているうちに、太が氣の毒な星の下に生まれたことに氣が付いた。太にそう言うと、

「そんな本、捨てちゃえよ」の一言で話は終わつてしまった。

結局その本は捨てずに今も家にある。藍はもう暗記してしまうくらい調べつくした。そして親兄弟ばかりでなく、友人、知人まで何気なく探りを入れて、生年月日を手に入れ、付き合い方の参考になっている。でも、あれ以来、宿曜占星術の話は太にはしていない。話したくて仕方がないのに、氣の毒で話せない。

囲炉裏端で、炙つたものを肴に日本酒を飲み、すっかり良い氣分になった。

鍋物迄平らげてしまうと、作務衣のお兄さんがすつと現れて、きれいに片付けお茶を入れ、菓子や果物を置いて下がつて行つた。

藍は、喉に引っかかっている話を話すのは今だ！と思つて、

「ねえ、あの占星術の本に太の父親と、弟と、妹が三人とも太を破壊する星だ  
って書いてあったのよ。お義母さまとは友達のような関係だった。

してみると、貴方のお父様と、弟、妹は私の味方という事なのかしら？ 私  
は運命の命ずるままに、太を破壊するために貴方の家に嫁に来たかしら？ 私  
は豊臣家に嫁いだ千姫と同じ？

福島に来るたびに事故が起きるといふことは、太の前世は福島で一家皆殺し  
をして、殺された方は『末代まで崇つてやる』とかお互いに言い合ったのか  
もね」

「……？ よくそんな事考えつくよなあ」

「今度は福島じゃなかったわね。崇りを東北一円にしたのかしら」

「しつっこいなー。見てきたのか藍は？ 生まれる前なんか、何もないのだよ。  
死んだあとだって何もなくなるんじゃないか。全部藍の妄想じゃないか、それも  
不愉快な……」

「本気で言っているわけじゃないでしょう、そんなにムキにならないでよ。こ  
んなに面白い話をあなたにも聞いてもらいたかったのよ。冗談をいっただけで  
しよう、面白がっていると思ってよ」

「それこそ、わざと嫌がらせをして、俺を破壊しようと思っているのじゃない  
のか、それとも、五〇%の夫婦が別れるのだったら、別れるつもりで言ってい  
るのか」

「えッ、五十%が別れるって……、五色沼の女将さんが言っていたことをあ  
なたに話したかしら？」

「もう何度も聞いたよ。」

「あらそおお、ごめんなさい」

藍はペロツと舌を出して早々に支度をして隣室のベッドにもぐりこんだ。

翌朝は昨日までの嵐が嘘のような快晴だった。

十和田湖迄は三百キロ位ある。

藍はけなげにも東北に来た時にはなるべく自分が運転しようと思っている。

「私が運転するわ」

「おお、」

太は、ボンネットが左右にめくれ上がり、いかにも事故車になってしまった  
車を矯めつ眇めつ見てから助手席に腰を下ろした。車はこんなにひどい状態な  
のに何の支障もなく発進できた。田沢湖の駅まで戻り、後は三四一号线に出て  
北上するのだが、太は途中の金物屋で何やら車の修理道具を買って、ボンネッ  
トを直し始めた。太は機械いじりや、ものの修理が好きなのだ。少し走って道

の駅に着くたびに直し、昼食後も直し、で十和田湖温泉に着くころにはあまり目立たなくなっていた。

宿に車を乗り入れて駐車場に停めた。

「すごいわねえ、ほとんどわからないわよ」藍は本気でそう思った。

「いらつしやいませ。お荷物を運びましょう」

ボーイが車の側に来て、ジロジロと見ている。

藍は、その様子を見て改めて車を見ると、まだまだ事故の痕が生々しいのがわかった。

部屋に落ち着いて、藍は座椅子に腰を下ろし足を投げ出して座り、両手で万歳を思いっきり伸びをした。そして、私ってなんて健気なのだろうと改めて思った。太のすることなら何でも実際より上乘せして良く思えてしまう。

今日一日、運転をし、時々降りて、太が車を直している間中、言われるがままにあちを抑え、こつちを持って修理の手助けをしていた。食事も道の駅で、無駄口も聞かず黙々と済ませ、ただひたすら太の動きを追っていた。

「上手い！とか出来る男！」とか合いの手を入れながら……

夕食はいかにも旅館の料理と云ったものが並んだ。前菜、刺身、揚げ物、煮物、茶碗蒸しもついて……という感じで、太はこのような定番料理が好きだ。

健気な藍は、太の機嫌が良いのを見計らって

「ねえ、明日は少し遠いけど恐山に行ってみない」

と、自分の希望を言ってみた。

「せっかく東北に来たのに、宿曜占星術の破壊につながる痕跡は、事故が起きて車を破壊してしまったことだけじゃない。あー、つまらない」。

すると太は血相を変えて、

「恐山まで何キロあると思っているのだ、ここから四百キロ以上あるのだぞ、明日東京に帰って、俺はあさってから会社で働かなくちゃならない。殺す気か！ああ、破壊するのか！事故を起こすのも、藍があちちに行け、こっちに行けって無理難題を押し付けるからじゃないのか？」

「何を言っているの！事故のお陰で、貴方は今日一日、大好きな車の修理が出来たじゃない。健気な私は、文句ひとつ言わずに付き合っただけなのに」

「馬鹿言っているのじゃないよ」

「いつだってそうなんだから、貴方って人は！」

こうして十和田湖の夜は更けて行った。

占星術の占いでは50%が別れるっていうけど……